

# 一人称表現と共起する「この」について

## On Japanese Demonstrative *Kono* Co-occurring with First-Person Expressions

孟 鷹

Meng Ying

### Abstract

This paper addresses the use of the Japanese demonstrative determiner *kono* co-occurring with first-person expressions such as first-person pronouns. Cross linguistically, it is not common for a demonstrative to modify a first-person expression, especially a personal pronoun. For example, in English, the co-occurrence of a demonstrative determiner (i.e., *this* or *that*) and a personal pronoun is not acceptable.

I argue that *kono*, when used with first-person expressions, functions as a non-restrictive modifier, just like non-restrictive clauses or non-restrictive adjectives. In other words, *kono* does not restrict the referent of the head, but instead serves one of the three functions. First, *kono* can activate specific information about the referent, namely the speaker, from the common experience or knowledge shared by the discourse participants. Second, when the first-person expression is in focus, *kono* may suggest a contrast between the speaker and other people. Finally, if there is an expectation that none of the discourse participants (particularly the speaker) is involved in the topic under discussion, the speaker can use *kono* to indicate his or her own involvement.

キーワード 指示詞 一人称 非制限性 *demonstrative* *first person* *non-restrictiveness*

### 1. 問題提起

指示詞はあらゆる自然言語に存在し、共通した機能と用法が観察される (Diessel 1999: 1、Diessel 2006: 469、Dixon 2003: 61 参照)。例えば、次の (1) におけるように、普通名詞「本」を修飾する指示詞「この」は、会話の現場にある特定の事物（机の上にある本）に談話参加者の共同注意を向けさせる機能を持つ。(1) のような指示詞の用法は、「外部照応的用法」(Diessel 1999) および「現場指示用法」(佐久間 1992、阪田 1992) と呼ばれ、日本語のみならず、英語など他の言語にも共通して観察される ((2) 参照)。

(1) (机の上にある本を指して)

この本、誰のですか？

(2) (机の上にある本を指して)

This book is mine.

しかし、日本語の指示詞には、一部の言語に観察されない用法が存在する。例えば、次の (3a) では「この」が一人称代名詞と共起している。

- (3) a. この私が負けた。 (Sawada & Sawada 2014: 181)  
b. 私が負けた。

次の (4b) に示すように、英語における指示詞 *this/that* は人称代名詞と共起できない。

- (4) a. I lost the game.  
b. \*This I lost the game.  
c. \*That I lost the game.

上記の (1) と (3a) における「この」は、どちらも会話の現場に存在する特定の事物を指示している。しかし、(3a) における「この私」の指示対象は、(3b) における「この」を伴わない「私」の指示対象と同じである。つまり、(3a) の「この」は「私」の指示対象の理解に影響を与えていない。一方、(1) の「この本」は「この」を伴わないと容認性が低下するため、(1) の「この」は「本」の指示対象の理解に影響している。

本研究は、一人称表現と共起する指示詞「この」に着目し、次の (5) に示す二つの問題を考察する。

- (5) a. (1) における「この」と一人称表現と共起する「この」の違いは、どのように捉えられるのか。  
b. 一人称代名詞と共起する「この」はどのような機能を持つのか。

本研究では、上述の相違が発生する理由を（非）制限性の観点から考察し、一人称と共起する「この」は非制限的修飾部であると主張する。さらに、一人称表現と共起する「この」には、情報追加用法、対比用法、一人称の話題化用法という三種類の用法があることを指摘する。

## 2. 一人称と共起する「この」について

## 2.1 Diessel (1999) による指示詞の分類

本節では、Diessel (1999) による指示詞の分類を概観し、上記 (1) における「この」と一人称表現と共起する「この」の用法の位置づけを述べる。Diessel (1999) は 85 言語のデータを基に、各言語に共通して観察される指示詞の語用論的用法を外部照応的用法 (exophoric use) と内部照応的用法 (endophoric use) に分類している。後者の中では、前方照応的用法 (anaphoric use)、談話直示的用法 (discourse deictic)、認識的用法 (recognitional use) の三つが挙げられている。

まず、外部照応的用法の指示詞は、聞き手の注意を会話の現場における非言語的要素に向けさせる働きを持つ (Diessel 1999: 93-94 参照)。そのため、指示対象は現場にある人物・場所・事物になる。上記 (1) と (2) における指示詞は、この用法に該当する。

次に、内部照応的用法における前方照応的指示詞は、先行文脈に現れた名詞句を同一指示する (Diessel 1999: 95 参照。(6) 参照)。また、談話直示的指示詞は、命題または発話行為を指示する (Diessel 1999: 101 参照。(7) 参照)。

(6) 昨日 山田さんという人に会いました。 ソノ人、道に迷っていたので助けてあげました。

(久野 1973: 186 より。一部改変)

(7) 日本人は、アメリカに対する関心が非常に高い。 これに対してアメリカ人の日本に対する認識は相対的に低いといってよい。

(金水・田窪 1992: 139 より。下線は筆者による)

(6) における「その」は先行文脈の「山田さんという人」と同一指示している。一方、(7) における「これ」は「日本人はアメリカに対する関心が非常に高い」という命題を指示している。前方照応的指示詞と談話直示的指示詞は、どちらも談話に現れる言語要素を指示するため、本稿では両者を区別せずに「文脈指示用法」<sup>1</sup>と呼ぶことにする。さらに、認識的用法の指示詞は、談話参加者の共通知識から指示対象に関する情報を活性化させ、共同注意をその指示対象に向けさせる働きを持つ (Diessel 1999: 105 参照。(8) 参照)。

(8) Do you still have that radio that your aunt gave you for your birthday?

(Diessel 1999: 7 より。下線は筆者による)

(8) における *that radio* の指示対象は、会話の現場にある事物でも、先行文脈に既出の事柄でもない。話し手は *that* を使うことにより、聞き手との共通知識から *that radio* に関する情報を聞き手に想起させようとしている。

以上のような Diessel (1999) の分類では、(1) における「この」と一人称表現を修飾する「この」の用法を区別することができないと考えられる。後者の場合、指示対象となる話し手は常

に会話の現場に存在するため、(1) の「この本」と同じく外部照応的な性質を持つことになってしまう。本研究では、両者の用法を区別するために、(非) 制限性という概念を使用する。

## 2.2 一人称と共起する「この」の非制限性

本節では、(非) 制限性の概念を概観し、上記 (1) と (3a) の用法がどのように区別できるのかを考察する。Martin (2014) は、制限性 (restrictiveness) と非制限性 (non-restrictiveness)<sup>2</sup> の違いに関して、次の (9) のように述べている。

(9) “... [T]he traditional intuition behind this notion [= (non)restrictivity] is generally clear: a modifier M restrictively modifies the head H when the contextual set of objects denoted by the modified head MH is *properly* included in the contextual set of objects denoted by H. On the other hand, M nonrestrictively modifies H if the contextual set of objects denoted by H equals the contextual set of objects denoted by MH.”

(Martin 2014: 38 により。四角括弧内は筆者による)

以下では、日本語の形容詞と英語の関係節を具体例として取り上げ、(9) の記述を説明する。

まず、次の (10) は、形容詞の制限的修飾の例である。下線部「赤い花」の主要部は「花」であり、世の中に存在するすべての花の集合が指示対象となる。形容詞「赤い」が付いた「赤い花」になると、「花」の指示対象の集合の中でも「赤い」という属性を持つ「花」だけが指示対象となり、白い花など他の色の花は指示対象から除外される。つまり、「赤い花」の指示対象となる集合は、主要部「花」の真部分集合である。したがって、修飾部「赤い」は、主要部「花」を制限的に修飾しており、主要部の指示対象をさらに限定する働きを果たしている。

(10) 白い花より、赤い花が好きです。

一方、次の (11) では、主要部「桜」は世の中に存在するすべての桜を指示していると考えられるが、修飾部を加えた「華やかな桜」であっても、その指示対象は世の中に存在するすべての桜のままである。桜の中でも華やかなものだけを指示する解釈にはなりにくい。したがって、次の (11) における「華やかな」は、名詞句全体の指示対象を変えないため、非制限的な修飾部であると考えられる。

(11) (飾り付けに使う植物の種類について話すとき)

地味なイグサより、華やかな桜が似合うかな。

言い換えれば、(11) における「華やかな桜」により、すべての桜は「華やか」という属性を備えているように解釈される。非制限的修飾部「華やか」は、主要部の指示対象をさらに限定するのではなく、主要部の指示対象に「華やか」という属性情報を付加している。

次に、英語の関係節における制限・非制限の区別を概観する。一般に、英語の関係節は、先行詞を制限的に修飾する制限関係節と、非制限的に修飾する非制限関係節とに分類される ((12) 参照)。

(12) a. The girl {who / that} wrote the book is a friend of mine. (制限的)

b. The bag, {which / \* that} was black, contained some books and papers. (非制限的)

(本多 2010: 75)

(12a) は制限的關係節の例である。一般に、關係節の制限的用法では、關係節により先行詞の指示対象が限定されるという (本多 2010: 76)。一方、(12b) の非制限關係節では、關係節の有無は、先行詞の指示対象の理解に影響しない。非制限關係節はその指示対象をさらに限定するのではなく、指示対象に関する情報 (そのバッグは黒であったということ) を付加する働きしか担っていない。

それでは、上述の (非) 制限性という概念を踏まえ、「この本、誰のですか」と「この私が負けた」の事例について考えてみたい。前者における「この」は、主要部「本」を制限的に修飾しており、指示対象を世の中に存在するすべての本から特定の本に限定している。一方、後者の場合、「この」は、「私」の指示対象を更に限定しているわけではないため、「私」を非制限的に修飾していると考えられる。したがって、一人称を修飾する「この」は、上記の (12b) の非制限關係節や (11) における「華やかな」と同様に、非制限的修飾部であると考えられる<sup>3</sup>。

なお、固有名詞を修飾する指示詞であっても、非制限的修飾部になる場合がある ((13) 参照)。しかし、例外もあり、例えば、同名の人物を区別するために「この山田じゃなく、その山田だ」のように述べる場合には、固有名詞を修飾していても制限的解釈を受ける。

(13) 株ってギャンブルですよーね!!! 投資とか投機とか言ってる人間が多いけど、私はギャンブル以外の何ものでもない!!! と思います。勉強して儲かるのなら、この日本は金持ちばっかりになりますもんね!!! 騰がるも運、下がるも運・・・ですよーね???

(現代日本語書き言葉均衡コーパス (以下 BCCWJ と略記) より。

出典は著者不明『Yahoo! 知恵袋』(2005)。下線は筆者による)

さらに、普通名詞を修飾する指示詞であっても、非制限的修飾になる場合がある。例えば、次の (14) における「この桜」の指示対象は、主要部「桜」の指示対象と同じく、世の中に存在

するすべての桜であると考えられる。したがって、この場合の「この」は「桜」を非制限的に修飾していると考えられる。

(14) (公園の中で、ある桜の木を指して、桜について紹介して)

この桜はバラ科の落葉樹です。

紙幅の都合上、これらの用法に関しては、これ以上扱わない。

### 3. 一人称表現と共起する「この」の語用論的機能

本節では、一人称表現と共起する「この」には、三種類の語用論的機能があることを指摘する。第一の機能は、談話参加者の共通知識から「この」が指示対象（話し手）に関する特定の属性情報を活性化させ、それを追加する機能である。本研究では、この機能を「情報追加用法」と呼ぶことにする。第二の機能は、話し手が発話の焦点 (focus) となる場合に、話し手と他者との対比を示す機能である。この機能を「対比用法」と呼ぶことにする。第三の機能は、談話参加者が第三者の立場として、自らが登場人物にならないと想定される話題に関して、会話をしているとき、話し手が「この」を用いて、自分自身を取り立て、実は自分もその話題に関与していることを明示する機能である。「この」は、他の談話参加者にとっての意外性を緩和し、談話上の情報処理を容易にする働きを持つ。この機能を「一人称の話題化用法」と呼ぶことにする。

#### 3.1 情報追加用法

非制限的な「この」を伴う (15) と指示詞を伴わない (16) は、ほとんど同じ意味を表しているが、ニュアンスが異なる。(16) では、単に「私が負けた」という事実が述べられている。一方、(15) からは、話し手の自負や自信が感じられる。この効果は「この」が使用されているために発生したと考えられる。

(15) (勝つ自信を持っていたが、試合に負けて)

この私が負けた。

(Sawada and Sawada 2014: 181 より。一部改変)

(16) 私が負けた。

((3b) を再掲)

なお、非制限的な「この」が常に話し手の自信を表すわけではない。例えば、次の (17) のような場合、非制限的な「この」は話者の自信を表していない。

(17) 振り返ると、物陰に白木隊長が気をつけの姿勢で立っていて、この俺に向かって挙手の礼をしてくれた。俺は、闇の中でいざりながら深々と頭を垂れたよ。所属の憲兵隊が俺を追い立てたのに、一般人の谷社長や、福原総領事、海軍だけは俺を人間として扱ってくれた。

(BCCWJ より。出典は帚木蓬生『逃亡』(2000)。下線は筆者による)

(17) は、話し手の「俺」が憲兵隊に追い詰められる際に、「白木隊長」と「福原総領事」などに助けられ、無事に逃げ切ることができたという話である。この場合の「この俺」は、話し手の自信ではなく、謙遜や卑下を表していると考えられる。

本研究では、上記の (15) や (17) のような用例を統一的に説明するために、庵 (1994、1995) による「テキスト的意味の付与」という考え方を援用する。次の 3.1.1 節では、庵 (1994、1995) による「テキスト的意味の付与」を概観し、それを踏まえて、3.1.2 節では、(15) と (17) に代表される「この」の用法を説明する。

### 3.1.1 庵 (1994、1995) による「テキスト的意味の付与」について

庵 (1994、1995) は論説文を中心とする書き言葉のデータを対象とし、固有名詞及び総称名詞と共起する「その」について考察している。庵 (1995: 81) によれば、固有名詞および総称名詞と共起する「その」は「テキスト的意味の付与」をマークする。ここでいう「テキスト的意味」とは、「名詞句が語彙的意味の他に各テキスト毎に臨時に持つ意味」である (庵 1995: 81)。例えば、次の (18) では、「その順子」の解釈は、前のテキスト「僕なしでは生きられないと言った」に依存している。「その」の指示対象「順子」は「僕なしでは生きられないと言った」という属性を持ったものでなければ、(18) の二つの文のつながりは不自然となる (庵 1995: 82 参照)。

(18) 順子は僕なしでは生きられないと言った。その／＃この／?? $\phi$ 順子が今は他の男の子供を二人も生んでいる。

(庵 1995: 79 より。下線は筆者)

言い換えると、(18) における「その」は、文脈に明示された「僕なしでは生きられないと言った」という属性情報を、臨時的に名詞句に付加する働きを持つということである。また、庵 (1995) によれば、「この」は「テキスト的意味の付与」をマークできない。そのため、(18) の「その順子」を「この順子」や「順子」に置き換えることはできない。

上記 (9) における Martin (2014) の記述を踏まえると、固有名詞と総称名詞と共起する「その」は、主要部の指示対象をさらに限定しないため、非制限的修飾部であると考えられる。そ



のため、庵により提示された「テキスト的意味の付与」の用法は、同じく非制限的修飾部である「この」の用法にも適用できる可能性がある。

### 3.1.2 「テキスト的意味の付与」から「この」の「情報追加用法」へ

3.1.1 節で概観したように、非制限的な「その」は、文脈に明示された属性情報を指示対象に追加する働きを持つ。この分析を踏まえると、(15) と (19) における「この」に対しても、指示対象（話し手）に何らかの属性情報を追加する働きを持つといった説明を適用できる。例えば、(15) における「この私」は「強い私」や「実力のある私」などのように解釈される可能性がある。「この」は「私」を非制限的に修飾し、「私が強い」や「私が上手い」などの属性情報を「私」の指示対象である話し手に付加していると考えられる。

しかし、非制限的な「その」と「この」には、いくつかの違いがある。まず、庵 (1994, 1995) による非制限的な「その」とは異なり、(15) のような場合、「この」により付加された情報は、先行文脈に明示されたものではなく、談話参加者の暗黙の認識として推測されるものである。Diessel (1999) の分類に従うならば、「テキスト的意味の付与」をマークする非制限的な「その」は、先行文脈に依存するという点で、文脈指示的な性質を持つと考えられる。それに対して、(15) におけるような「この」により追加された属性情報は、認識的指示詞に類する性質を持つ。つまり、談話参加者の共通知識から、指示対象に関する特定の情報を活性化させる働きを持つということである。しかし、一般的な認識的用法の指示詞の場合、活性化された情報は聞き手が指示対象を特定させるために用いられるのに対して、(15) における「この」は、問題となる話し手の属性情報を聞き手に想起させるために用いられている。(15) では、それは「強い」や「上手い」などの、話し手の実力に関する情報である。話し手は「この」を用いることによって、聞き手に自分の実力を想起させることにより、「私は強いのに負けた」という驚きを伝えている。

なお、話し手が追加しようとする属性情報は、必ずしも聞き手の認識や記憶に一致するわけではないという点に注意されたい。「この」によって活性化させられる属性情報は、話し手の想定している（聞き手との）共通知識に基づくものであり、聞き手の記憶や認識とは異なるものである。例えば、次の (19) では、話し手が伝えたい自分自身に関する属性情報を、確実に聞き手に特定させるために、その属性情報に関する具体的な説明を「この」の直前に追加している。

- (19) アセンション島で数匹の海ガメが捕らえられ、ランダーは船長から、海ガメを生かしておくために朝晩その目を洗うよう頼まれる。ランダーは反発した。「ごく最近、高貴な人々と握手を交わし、王族の宮殿に泊まったこともあるこの私に？ハウサ族の女王に出迎えられ、ナイフェ族の誇り高い王子と肩を並べて歩いたこの私に命じるのか...」。反感はつのつてい



く。「私の社会的重要性によって登り詰めた高みから、かくも突然に落下し、威厳も名誉も忘れ去られ、下僕の地位に貶められ、海ガメの汚い目を洗うという卑しい仕事をしろというのか？」。

(BCCWJ; ピーター＝レイビー・高田朔 (訳)

『大探検時代の博物学者たち』(2000); 下線は筆者による)

(19) における「この」は、自分の「高貴さ」などの属性情報を活性化させ、それを聞き手に想起させる働きを持つと考えられる。話し手は、聞き手がその属性を確実に特定できるように、それを示す具体例として、「ごく最近、高貴な人々と握手を交わし、王族の宮殿に泊まったこともある」という内容を付け加えていると考えられる。

以上の点を踏まえると、情報追加用法の「この」が担う機能は、次の (20) のように一般化できる。

(20) 一人称を非制限的に修飾する場合、指示詞「この」は談話参加者の共通知識から、指示対象（話し手、または一人称複数の場合は話し手を含む複数の人物）に対して、特定の属性情報を活性化させ、付加的に与えることができる。

つまり、一人称を非制限的に修飾する「この」の使用から話者の自信を感じとれる理由は、「この」により追加された属性情報が話し手自身に対する評価になるためであると説明される。例えば、(15) の「この」では、話し手が自分を高く評価するような情報を聞き手に想起させようとするため、自負・自信の効果が生じる。一方、(17) における「この」により付加されている情報は、「追い詰められた、みっともない」といった属性情報であると考えられる。そのため、話し手は自分自身を低く評価していることになり、(15) とは逆の謙遜・卑下の効果が生じる。

なお、「この」により追加される属性情報が自分自身に対する高い評価にも低い評価にもならない場合がある。例えば、次の (21) と (22) における「この」の使用には、話し手が自分を高く評価したり、低く評価したりする効果はない。

(21) それに、どうしてこのおれがふたたびアメリカの土を踏みたいなどと思うのか？ あんなところに戻るくらいなら、パラナケの臭い空気を吸うほうが、いや、死んだほうがましだ。

(BCCWJ より。出典はキャンベル・アームストロング、飯島宏 (訳)

『闇から来た刺客』(1993)。下線は筆者による)

(22) だから美術史家がもはや様式としてのマニエリスムはないと言い張ろうがどうしても、私がマニエリスト、この私がいるかぎり、生きているかぎりマニエリスムはある」のだと、どこ吹く風。

(BCCWJ より。出典は高山宏『表象の芸術工学』(2002)。下線は筆者による)

(21) では、「この」により追加されたのは、話し手の「もう二度とアメリカに行きたくない」や「アメリカが嫌い」などの中立的な性質であり、自分自身に対する高い評価や低い評価ではない。さらに、次の (22) では、「この」の使用により、話者「私」に「マニエリストである」という属性情報が追加されているが、話者の自信や卑下は感じとれない。

### 3.2 対比用法

一人称表現が発話の焦点 (focus) に当たる場合、非制限的な「この」の使用は、話し手と他者との対比を表す。例えば、次の (23) では、A による質問の「誰」に対して、B は「私」と答えているため、下線部の「私」が焦点に当たる。(23) と指示詞の付いた (24) は、どちらも、語用論的に「この問題を解いたのは私、そして私だけである」と解釈される。しかし、(23) では話し手のみが問題とされているが、(24) では他の人の存在が意識され、話し手の「私」と他人との対比が示されている。なお、(24) における「この」が、何らかの属性情報を想起させ、それを追加する働きはない。

(23) A: この問題、誰が解いたの？

B: 私です。

(24) この私です。

次の (25) と (26) も同様である。(25) では、下線部の「この」があることにより、「私」が他の人物（文脈から話し手の息子であることが分かる）と対比的に示されており、「息子は巻き込まないでほしい」という意味が生じる。また、(26) では、「このわたし」によって「他の誰でもなくわたしが」というような対比的な意味が表されている。それにより、話し手が息子の代わりに刑に服そうとする意志が伝達される。

(25) 「私に恨みがあるのなら、この私に向かってきなさいよ！この卑怯者」「その言葉、そっくりあなたに返すわ。久我まで巻き込んで、亭主取られた腹いせに醜いことしてくれたわよ。この卑怯者！」「いい？もう二度と息子に手を出したら承知しないわよ！」

(BCCWJ より。出典は多田洋一、小森名津『愛のソレア』(2004)。下線は筆者による)

(26) 先の母親は、「できることなら、このわたしが代わって罪の償いばしたかったとです」と言うほどに息子を深く愛しながら、息子には潔く刑に服して早く逝けと言うのである。

(BCCWJ より。出典は堀内一誠『こころの目薬』(2003)。下線は筆者による)

### 3.3 一人称の話題化用法

談話の中で、話し手が登場人物として話題に取り上げられることが、聞き手にとって予期しにくい場合に、話し手は自分自身を「この」により取り立て、自分自身への言及を明示することがある。この用法の「この」には、聞き手にとっての意外性を緩和し、談話上の情報処理を容易にする働きがあると考えられる。

例えば、次の (27) では、「諏訪部」と警察官と「富士子」の三人が、ある事件の犯人は誰なのかについて議論している。下線部直前の会話では、人物や物事（犯人の条件、犯人になり得る人物など）が話題に上がっている。それらの事柄は、三人の談話参加者により客体として取り上げられている。つまり、談話参加者は、話題に登場する人物や物事についての観察や言及を行う主体であり、それらの人物や物事からは独立している。下線部の発話では、話し手の「諏訪部」が実は自分も犯人になる条件を備えていると述べている。元々話題に上がった事柄から独立していた話し手（諏訪部）が、話題の登場人物に取り込まれ、語られる客体として取り上げられることになる。話し手は、その立場の変化を示すために指示詞「この」を用いている。

- (27) 「じゃあ、犯人は白峰園グループの関係者ですか」富士子が怯えた目で言った。「そう、あるいはご家族の誰かか、それに繋がる外部の人間ですね。そのほか、かつて栗石さんにひどい目に遭わされた事がある人物。さらには、これからそうなりそうだった人物も含まれるでしょう。ただ共通して言えるのは、栗石さんの崇徳信仰を知っているという点です。その条件を備えた者の中に犯人がいると限定していいでしょう」「そうは言っても、その条件を備えた者はかなりの人数になりますよ」諏訪部が首をひねった。「たとえばこの私もその一人だし、坂口さんだってそうだ。白峰園の職員は全員知っているんじゃないかな」

（BCCWJ より。出典は内田康夫『崇徳伝説殺人事件』（1997）。下線は筆者による）

また、ここでの「この」の使用は、聞き手（警察官と富士子）に対し、話し手が自分も犯人の可能性があると述べることの意外性を緩和し、談話上の情報処理を容易にする役割を果たしていると考えられる。

さらに、次の (28) では、下線部の「この」が共起する「私」は二重下線部の「僕」であり、聞き手は二重下線部の「彼」である。二人は、「仁科」という人物の「成功」に関して、傍観者の立場で会話をしている。しかし、二重下線部の「彼」による「成功にもいろんな種類があるだろう」という発話をきっかけに、会話の話題が「僕」が所属する「経済界」に移り、第三者の立場であった「僕」が話題の登場人物に取り込まれている。その結果として、「僕」は、自分自身を話題に取り上げることになる。指示詞「この」の使用は、そのような立場の変化を反映していると考えられる。

- (28) 「彼も人生の訂正を考えた。そういうわけだね。だけど彼が持論という結論をだすのは、少々おそかったんじゃないのかな」「皮肉がお上手ですね。たしかに若くはない決断でした。仁科が画家たることを断念したのは、五十代半ばです。ただ、それが成功したことは申しそえておく必要がある」「成功にもいろんな種類があるだろう。その方面のある一部。きみはそういった。ということは、きみのいう経済界でも表舞台といえるところじゃない。そんなふうには聞こえないでもないね。そのくせ、たしかにきみたちは権力にさえ一定の影響力を発揮できる立場にもいるようだ。やくざや官憲と無縁に、ああいうカジノをひどくオープンに経営できる。発砲事件を闇に葬りさることができる」彼は首をかしげながら、あいかわらず僕を見つめていた。興味のいろがその目にいまうかんでいる。やがて苦笑がそれにとってかわった。なにかの問いに結論をくだしたような笑いだった。「どうやら、あなたには率直な態度をとるしかないようだ。端的にお話しましょう。たしかに仁科、ひいてはこの私も経済システムの裏面で生活しています。いささか自虐的ですが、暗部といってもいい。しかし、この国のシステム全体がわれわれの存在を抜きには語れないんですよ」

(BCCWJ より。出典は藤原伊織『ひまわりの祝祭』(2000)。下線は筆者)

#### 4. おわりに

本研究では、指示詞「この」が一人称表現と共起する現象に着目し、以下の二つの問題を考察した。

- (29) a. (1) における「この」<sup>4</sup>及び一人称表現と共起する場合における「この」の違いは、どのように捉えられるのか？  
b. 代名詞を含む一人称表現と共起する「この」の具体的な働きは何なのか。

一人称表現を修飾する「この」と普通名詞を修飾する「この」との根本的な違いは、主要部の指示対象をさらに限定するかどうかにある。一人称を伴う「この」は主要部に当たる一人称表現の指示対象をさらに限定していないため、非制限的修飾部であると考えられる。一方、(1)における「この」は、主要部の指示対象を特定の対象に限定しているため、制限的修飾部であると考えられる。さらに、一人称を伴う非制限的な「この」の具体的な働きとして、次の三つの用法を指摘した。第一に、一人称表現を修飾する場合の「この」は、指示対象に対して特定の属性情報を談話参加者の共通知識から活性化させ、追加する(情報追加用法)。第二に、発話において一人称が焦点に当たる場合、非制限的な「この」は、話者と他者との対比を示す働き

を持つ（対比用法）。第三に、談話参加者が、話し手が登場人物となることが想定されない場面において、話し手が自分自身を「この」により取り立てることにより、その意外性を緩和し、聞き手の解釈を容易にする働きをする（一人称の話題化用法）。

## 注

- (1) 「文脈指示」という用語は、日本語の指示詞に関する研究で広く使われているが、研究により解釈が異なる場合がある。本稿では、Diessel (1999) における前方照応的用法と談話直示用法を「文脈指示」と呼ぶことにする。
- (2) 先行研究では、「制限性」に対して restrictiveness のほかに restrictivity (Martin 2014) という用語も用いられるが、本稿では、制限性を restrictiveness、非制限性を non-restrictiveness と呼ぶことにする。
- (3) 英語の指示詞 *this/that* は、第 1 節で述べたように、代名詞とは共起できない。しかし、それは、英語の指示詞には非制限的な用法がないというわけではない。下記の (ia、b) に示されるように、固有名詞を修飾する場合に、非制限的と見なされる用法が観察される。
  - (i) a. *This Henry Kissinger really is something!* (Lakoff 1974: 347 より。下線は筆者による)
  - b. *That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood!*  
(ibid. 352 より。下線は筆者による)
- (4) 2.2 節で述べたように、普通名詞と共起する指示詞が必ずしも制限的解釈を受けるとは限らない点に注意されたい。ここでは 1 節で挙げた (1) におけるような用法に限定している。

## 引用文献

- Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Diessel, H. 2006. Demonstratives, joint attention, and the emergence of grammar. *Cognitive Linguistics*, 17: 463-489.
- Dixon, R. M. W. 2003. Demonstratives: A cross-linguistic typology. *Studies in Language*, 27: 61-112.
- 本多正敏. 2010. 統語構造地図に基づく関係代名詞節の分析—試案—. 『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』 16: 75-104.
- 庵功雄. 1994. 結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対する一つの接近法—. 『大阪大学

- 日本学報』 13: 31-43.
- 庵功雄. 1995. テキストの意味の付与について一文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に一. 『大阪大学日本学報』 14: 79-93.
- 金水敏, 田窪行則. 1992. 談話管理理論からみた日本語の指示詞. 金水敏, 田窪行則 (編) 『指示詞』: 123-149. 東京: ひつじ書房.
- 久野暲. 1973. 『日本文法研究』. 東京: 大修館書店.
- Lakoff, R. 1974. Remarks on ‘this’ and ‘that’. Michael W. La Galy, Robert A. Fox and Anthony Bruck (eds.) *Papers from the Tenth Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, April 19-21, 1974*: 345-356.
- Martin, F. 2014. Restrictive vs. nonrestrictive modification and evaluative predicates. *Lingua*, 149: 34-54.
- 坂田雪子. 1992. 指示語「コ・ソ・ア」の機能について. 金水敏, 田窪行則 (編) 『指示詞』: 54-68. 東京: ひつじ書房.
- 佐久間鼎. 1992. 指示の場と指す語—「人代名詞」と「こそあど」—. 金水敏, 田窪行則 (編) 『指示詞』: 32-34. 東京: ひつじ書房.
- Sawada, O. and Sawada, J. 2014. The meaning of modal affective demonstratives in Japanese. Seungho Nam, Heejeong Ko and Jongho Jun (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 21*: 181-196. Stanford, CA: CSLI Publication.

### 例文出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(通常版) 国立国語研究所.